

黒毛和種の繁殖能力の評価法

福島県畜産試験場 肉畜部
平成16年研究報告

1 部門名

畜産－肉用牛－育種・選抜
分類コード 07-02-03000000

2 担当者

萩原瞳・石川雄治・佐藤亮一・国分洋一

3 要 旨

現在の肉用牛の改良は「産肉性」の改良を中心に枝肉6形質の育種価評価を利用して進められている。一方で、繁殖能力や哺育能力などの「種牛性」は、子牛の生産効率を高めるうえで重要であるにもかかわらず、育種価評価による改良は遅れているのが現状であり、産肉能力と種牛性を合わせたバランスのとれた繁殖雌牛の改良が課題となっている。

そこで、種牛性の育種価評価法の確立を目指し、特に繁殖能力の評価方法について検討を行った。繁殖能力の評価については、分娩間隔、初産月齢の育種価評価が行われ始めているが、遺伝率が低いため、それらを個々に取り上げずに繁殖能力を総合的に考慮できると思われる4産次分娩時日齢を用いた繁殖能力の評価の有効性について検討を行った。

- (1) 4産次分娩次日齢及び分娩間隔の遺伝率を算出したところ、それぞれ0.135、0.111と推定され、4産次分娩次日齢の遺伝率が分娩間隔のそれより高くなったことから、4産次分娩次日齢を利用した繁殖能力推定の有効性が示唆された。
- (2) 4産次分娩時日齢に対する遺伝的パラメータを用いて、県内で利用されている主な種雄牛の育種価を推定したところ、同一系統間内の種雄牛においても差はあるが、気高系種雄牛の育種価が他の系統に比べて比較的高い傾向となり、各々の種雄牛の育種価をみると、生産現場での実感と一致するものであった。

以上の結果から、4産次分娩時日齢を用いた繁殖能力の評価が有効であることが示唆された。

4 その他の資料等

なし